

# 逃れられない頼れる場

コラム……………

## うちなあ見聞録

本コラムでは、沖縄のヤンキーの若者たちが生きてきた

いる地元について描く。10年前、ゴーパーチ(国道58号線)で暴走したり、それを見物していたヤンキーの若者たちは、その後、建設業の従業員、性風俗店のボーイなどになった。彼・彼女らにとつて、それぞれ地元の姿は異なるが、地元と無関係に生きる者はほ



打越 正行

ヤンキーと地元

192

とんどいかなかった。

それほど、沖縄のヤンキーの若者たちにとつて地元は中心の場所だった。そこで展開されたそれぞれの人生の断片を以下で紹介する。貴重な地元紙の紙面を割いてでも、私が書くべきことはそれに尽きる。

勝也 \* \* 勝也 知れてるよ沖縄なんて、なにもかも。マナブに「(アニキ)、そうっすよね? マナブ 終わってるぜ。どう(おまえ自身)が一番トップにたたくと、なんもできん。勝也 うん。 マナブ お金がまわってこないからな。 勝也 はい。 マナブ いつまでも下の人

間だったら、人の下のまま。

沖縄のヤンキーの若者たちの就く仕事のひとつに違法就労がある。冒頭の勝也とマナブは、地元の先輩から違法就労の誘いを受けていた。そのどのくらいの期間にわたり「くまる(収監する)」ことになりのかを天秤にかけて、「引き合わない」と判断した。その判断は、地元の先輩たちの実例に基づいてなされた。彼らが違法就労に就くのは、地元では「トップに立たんとなにもでき」ず、「下には」お金がまわってこないからだ。そもそも彼らの多くは、家庭や学校、地域社会といった既存の制度や社会から提供される支援やサービスを受けて

いない。年金や社会保障などは、彼らには存在しないに等しい。そんな彼らが頼れるものが、地元の人間関係であった。

しかし、その人間関係は助け合いの相互扶助とは異なる、奪い合いの世界だ。若い頃はこき使われ続ける日常が延々と続く。この先、行き詰まるのがわかっているなかで、地元の人間関係とそこから得ることのできる情報などの資源だけで、なにか稼ぐ仕組みを作らなければならぬ。「トップ」にまわるか、「下」に留まるかを20代のうちに決めなければならない。

この決断を迫られることは、とてもきつい。地元で「トップ」に立つことは、地元の先輩たちをこき使い、同時に後輩らを食べさせることであった。地元つながりを抜けて、地元で安定して過ごせる人生がそこにはない。

階層移動が難しく、転職可能な資格もない。このような逃げられない状態で、持ち合わせの資源は地元で調達するしかない。そうこうするうちに、地元の人間関係にはめ込まれ、そこで決断を迫られる。このように違法就労に就く若者は、悪意や物欲によってではなく、地元を頼らなければならぬ生活基盤の脆弱さ、それを回避すべく地元で形成された社会関係によって、構造的に生み出されている。

(社会学者)

うちこし・まさゆき 1979年、広島県生まれ。社会学者。現在、特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究員、沖縄国際大学南島文化研究所・研究支援助手ならびに琉球大学・非常勤講師。著作に『ヤンキーと地元』(筑摩書房、2019年)などがある。

沖繩タイムズ 2019. 8. 17(土)

# 建設業からヤミ仕事へ

コラム……………

## うちなあ見聞録

196



沖繩の建設現場で働きながら社会調査をしてきた。建設現場で働く従業員は、朝の8時から、ずっと終業時刻の5時半を指して働く。現場は暑く、資材は重く、そして時には痛みも伴う。このような感覚で働くため、仕事を終えた時の解放感は、他のどんな

打越正行

### 「現場号」からの風景

仕事よりも格別なものだ。帰りの現場号（建設会社の移動用の車両）では、運転手を尻目に従業員たちはサザンスタールを飲み干す。この時間は、丸一日感じた苦痛から解放され、何も考えずボーっとしていられるひと時となっていた。現場で働いている時は、とにかく5時半が来ることだけを考え、新参者は目の前の作業に、そして中堅、ベテランは全体の目配せに集中している。帰宅しシャワーを浴びて夕飯を食べたら、次の日の朝になつていく。早朝の現場に向かう車内は、その日の作業のことを考えると憂鬱になる。一日のうち、帰りの車内でのみ苦痛から解放され、なにも感じず考えなくてもいい格別の時間となる。建設業の現場で作業員として働いていると、年間の暦や将来展望などの時間軸を意識する機会がほとんどもてなくなる。時間を意識するのはせいぜい1週間単位で、始まるの月曜は先をみないよう、その日一日だけを意識し、水曜あたりからはカウントダウンを始める。金曜あと一日、土曜でやっと1週間を終える。土曜の夜、繁華街へと繰り出して朝まで飲むと、大抵日曜はつぶれてしまう。そしてまた憂鬱な月曜がやってくる。

この1週間のサイクルを、1年、そして15歳から30代そして60代まで繰り返す。考えることは、今週はいくら前借りをして、それで今週はどうやってやりくりするかである。このような1週間を淡々と繰り返すため、数年後のことは考えないようになる。また自身になにかあった時のこと、そして身内のことなども考えきれず、現在の自分と、そのことで精一杯となっていた。

他方で帰りの車内で、漠然と現状や将来に不安を感じると現れた。現場からの帰路、者もいた。現場からの解放感を味わいながら、現場号の車窓からふと外の風景を見て我に返る。現場で10年近く働いていた智哉（仮名）は、帰りの車内で「このままでいいのかな」と、その後の人生について考えたという。そして「建築は一生やる仕事じゃない」と考えるにいたり、ヤミ仕事の準備を始めた。先月のコラムで書いたように、安定層とは異なる周辺層の若者にとつて、地元では一人で生計をたてる選択肢がない。ゆえに1週間を淡々と繰り返す人生か、そこから抜け出し後輩たちを引き連れて何らかの事業を立ち上げる人生か。後者には違法なことも含まれるし、失敗すればその地元での評判は厳しいものとなるリスクもある。どちらも過酷な選択だった。安定層の人びとからは接する機会の少ない彼らの世界がある。そこでは人生設計の進め方やみえる風景が異なる。現場号の帰りの車内に彼らの人生の岐路があった。

（社会学者）

# 昇進機会の制度保障を

コラム……………

## うちなあ

## 見聞

## 録

建設現場の休憩時間に、班長を務める男性から、「娘が大学に進学したららしいんだけど、どうしたら入れる？」と聞かれたことがある。「わからないことがあれば、先生に聞けばいいじゃないですか。やさしいですよ。もし聞きつらかったら、教科書があ



### 打越正行

### 建設業の景気と暴力

200

るじゃないですか。めっちゃわかりやすく書かれてますよ」と答えた。

現場で日常的に行われている厳しい指導への皮肉を込めた冗談として、また教師や教科書もない現場で一人前となった班長らへの敬意を込めて

そのように答えた。新米の従業員が仕事を覚えるためには、先輩がやっている様子を盗むしかなかった。そこで何度も同じミスを繰り返す者や向上意欲のない者は、頻繁にあげられ（怒鳴られ）、時にはくるされる（暴行を受ける）こともあった。

し彼らと同じ立場にいたら私もその関係にもとつき手を出していたかもしれないと考え、この場合はある（ホワイトカラー職で部下に同様の対応を行うことは、単に怠慢であるため、そのように考えることはできない）。

配慮は不要となった。若い者から辞めていったが、それは彼らのやる気がなくなったためではなく、業界の景気によるものだった。小規模の会社ではダンピング覚悟で仕事を請け負い、後輩従業員たちを働かせて徹底的に搾り取った。現場の雰囲気は悪くなり、暴力も振るわれた。

7年前、その親方はスリムな体型で狭い現場をすり抜けるながら働いていた。その後、独立した直後の厳しい時期には自らも現場に出て働いた。現在、彼の腰回りには贅肉がつき建築会社の社長らしい体型になっている。今は現場に出なくても、自分一人分程度の「あがり」を確保できているという。

(社会学者)

# 人の動きで場を制する

## コラム…… うちなあ見聞録

204



20<sup>き</sup>ほど離れた那覇とコザの二つの町は、車なら(渋滞がなければ)1時間程度で移動できる。二つの町で通勤、通学している人も多く、その距離はそんなに離れていない。他方でこの二つの町の文化に温度差を感じている人は多いのではないだろうか。それ

### 打越正行

### 那覇とコザ

を感じるのは、使う言葉や人間関係の取り方の場面であつたりする。ヤンキーの若者たちのなかにも、その違いは存在し、那覇では「コザは独特だよね」と言われ、コザ周辺では「那覇は怖い」と言われる。

今年の夏、中部の建設作業員(元ヤンキー)の竜二(仮名、以下同じ)とひろしから買物に誘われた。買いたい物があるが国際通りでしか売っていないという。そこで南部方面に住む私は、中部から向かう彼らと那覇で待ち合わせをする事となった。

「てんぷすつてわかりませう?」「知らん」ジュンク堂、昔のダイナハは?」「ダイエーは泡瀬しか知らん」OPAはわからないですよね……だったから新しいバスセンターわかります?」「バス乗らん」。

待ち合わせ場所がなかなか定まらなかった。最終的に那覇署の駐車場で私たちは合流し、国際通りへと向かった。竜二は、コンビニでマスクを購入し顔を隠して歩いた。竜二は20年ぶり、ひろしは30年ぶりに国際通りを歩いた。2人とも「那覇は怖いな」と繰り返した。

その日の夜、彼らの建設会社で従業員主催のボウリング大会があった。チーム対抗戦で決着がついた後は、行きつけのバーに移動し、ダーツをしたり地元のお話で盛り上がった。朝方の酔いがさめてきたところで、最後にキャバクラに行くことになった。どこの店に入るかは、先輩たちのお気に入りのキャバ嬢のいるところと決まっている。後輩の従業員が地元の知り合いがボーイを務める店に電話し、料金や時間、特定のキャバ嬢が席に着けるかといった交渉をすすめる。話はまとまり、最後に電話口で先輩が「いま行って大丈夫か」と確認して、店に向かった。

この確認は、店内に酒グセの悪かったり店で暴れたことのある人物はいないかということである。より具体的には今から向かうメンバーたちと敵対していたり微妙な関係にある人物はいないかという確認である。そのような日々更新される街の様子、そしてそれぞれ異なる人間模様を把握できることがこの街のボーイには求められた。

同じ沖縄に生きていても、世界の見え方はまったく異なる。私にとつては那覇よりコザの繁華街の方が危なっかしう感じた。彼らにとつて、コザの繁華街は自分たちの領域内何が起るか予測ができき、またなんとか対処ができる。そのように見通せるのはそこでの人間の動きが見えてくるからだ。だから彼らにとつて人間の動きがみえない那覇は怖い。

世界の見え方(文化)に優劣は存在しない。異なる世界について互いにわかるように描き、その変化を社会の変化とともに追跡する。そこに現代社会を生きるヒントがあるように思う。(社会学者)

# 働く場 多様な人に提供

## コラム…………… うちなあ見聞録

建設現場にはさまざまな人が働いている。暴走族あがりの若者、元暴力団関係者、夜は飲み屋に出勤しダブルワークで子どもを育てるシングルマザー、外国人、そして軽度障がいのある人たちがいる。そこは会社からすると利益をあげる場所であり、従業員



打越 正行

生活を守った建設業

208

員からすると稼ぐための場所だ。

賞醒剤使用で刑務所から出てきたヒロシ(仮名)も従業員のひとりだ。彼は、20年前から刑務所に入ったり出たりを繰り返していた。そのように刑務所に入り浸る人たちのことを、他の従業員は「いちむどやー(行ったり来たりする人)」と呼んでいた。

「復帰」前に生まれたヒロシは、10代の頃からシンナーを吸い、その後は覚醒剤に手を出すようになった。出所しても再び覚醒剤に手をだし、すぐに刑務所に戻ることを繰り返した。建設会社の社長は、となり町の後輩であるヒロシ

が出所するたび仕事に誘った。

班長は、ヒロシの働きぶりについては「使えない」と手厳しい。他方で「ヒロシさん、しばらく刑務所、行つてないよ。前までは出て来てすぐ戻つたのに、その前は1年、2年、今回は5年くらい行つてないはずよ」と話してくれた。

建設現場では、暴走族あがりであることの「特権」も一時的なものである。また女性であること、障がいがあることへの「配慮」もほとんどない。ただただ多くの資材を速く運び出せる能力と経験が評価される。建設現場に出入り

するさまざまな人を、「使えない」か否かだけで平等に扱う感覚が班長の言葉にはよく現れている。

賞醒剤使用でヒロシの刑務所に行く期間が空くようになったのは、とにかく刑務所から出てきてすぐ働く場所があったからだろう。そこで「使えない」とバカにされながらも、日々汗を流し、休憩時間には昨日行ったスロットの結果について、みんなで盛りあがる。従業員の多くは、懸命に移いだお金を握りしめスロットに賭ける。店の出玉情報や最近の自身の結果について、自身の台を見極める力があることを誇示しながらとうとうと語る。

仕事とその後のスロットの繰り返し、当初は平凡にみえ、なにか楽しいのかわからなかった。しかし、ヒロシの表情

をみて、私も自身の目を信じて建設の給料を賭けて、その結果について語り合いたくなった。彼は、ここしばらく刑務所に行っていない。仕事の後のビールは止まらず、現在はアルコール依存症の疑いがある。班長は「覚醒剤よりはいいんじゃない」と笑った。

県内の建設会社の多くは、その規模が中小零細であるため従業員に社会保険などの加入を行えない。しかし、さまざまな人に働く場を提供する形で生活を保障してきた。県内の建設会社の多くは、完工実績や社会保険の加入実績では評価されない脆弱な「ブラック企業」であっても、このように沖縄社会の末端で生きる人びとの生活を守ってきたのである。

(社会学者)

# 適正評価ないといつらい

コラム……………

## うちなあ見聞録

肉体労働は、きつい、汚い、危険の3K型職業と言われる。自動車の塗装工、そして建設業の左官屋や解体屋などが

肉体労働だ。どれも身体的にきつい仕事だが、そこで働く者たちの世界からは、そこにある違いが見えてくる。

自動車塗装工の悠馬(仮名)は、仕事に強いこだわりを持つ。



### 打越正行

#### 肉体労働者の技術

212

っている。彼は暴走族時代に自ら習得した塗装技術が高く、工場では数年足らずで一人前となった。さらなる技術習得への意識も高い。彼によると、自身は5段階程度のレベルの異なる技術を持ち合わせていて、客の要求に応じてそれらを的確に使い分けた。

「車にこだわりのある自衛隊の客とかには、Sランク(最高レベル)の仕事で挑むわけよ。けど車のわからんおぼさんたーにSの仕事しても、その違いはわからんさ。『修理代が高い』とか言われるさ。それは(い)やだから、Dくらいの仕事で安く早く仕上げあげられるわけよ。そっちの方が客も喜ぶさ」

悠馬は向上心をもって働いたが、給与は変わらなかった。彼は移籍することを視野に入れて、社長に訴えた。社長は彼の月給を5万円上乗せした。彼は「これまでどれだけピンハネされてたんだろ」と笑いつつ、社長の対応を粹に感じて、それまで以上に仕事に打ち込んでいる。

圭介(仮名)は左官屋として働いていた。建物の壁を、こてを使って滑らかに塗りあげる仕事だ。パティシエのように壁を塗る熟練の技術はつい見とれてしまう。新米の頃は凸凹の壁をサンダーで削ったり、セメントをつくる作業が中心だ。そのような下積みを重ねて一人前となる。圭介も4、5年かけて一人前と認められる技術を習得し、こだわりのもって働いていた。

(社会学者)

# 問われる生き抜き戦術

## コラム…… うちなあ見聞録

昨年末、調査でお世話にな

っている建設会社の忘年会に参加した。1次会はカラオケで盛り上がり、2次会は繁華街へと繰り出した。バーに行くことになり、ある先輩が路上に立っていた地元の後輩のボーイに問いかけた。

「最近、半グレが出入りし



打越正行

沖縄の繁華街を生きる

216

録

てるらしいけど、おまえの店は大丈夫か?」。後輩は「うちの店は全グレ(ヤクザ)なら先週きましたけど、〇〇(隣の)のしーじやなんで大丈夫ですよ」と答えた。同行した先輩は笑みを浮かべ、私たちは安心して入店することができた。

彼の返答は、この街でボーイとして生きる過程で編み出された洗練されたものであった。冗談をかまし笑いをとりながら、この街で「半グレ」はまだ外者であり、「全グレ」が仕切っていること、そして出入りする「全グレ」は、自身とも先輩とも顔なじみの者であることを伝えている。先輩が安心して入店できたのは、後輩がその特定の「全グレ」に対して関係を築いて、近況を把握しており、仮にトラブルが生じても対応できる見込みがあるためだ。

後輩があらゆる「全グレ」に対して大丈夫とは言っていないことが重要だ。彼の返答は裏付けのないその場限りの対応とは異なる。特定の「全グレ」がそのバーに出入りしていることは、すぐに街中に知れ渡る。それによって、このバーから遠のく客と常連客とが緩やかに分かれていく。その過程で、店の色はある程度固められていく。あらゆる客が自由に匿名で出入りできるバーなど、危なっかし

は、暴力、資金力、そして風営法を恣意的に解釈できる権力を独占することが求められる。沖縄ではどこかに頼ることなく、常にいくつかの状況を読み解く能力が求められる。これが沖縄の繁華街を生きる困難さである。ボーイの返答には、このような事情が如実に表れていた。

また、繁華街におけるさまざまなリスク(泥酔したお客の対応や公安の内偵捜査など)に対して、行動をパターン化したり、傾向を数値化して対処しているのでもない。一人一人が限られた経験と社会関係をその都度に活用して対処している。沖縄の繁華街を生きる過程では、そのようないくつかのリスクを同時に回避しつつ利益を出すことが求められた。

本土の繁華街で生き抜くには、暴力、資金力、そして風営法を恣意的に解釈できる権力を独占することが求められる。沖縄ではどこかに頼ることなく、常にいくつかの状況を読み解く能力が求められる。これが沖縄の繁華街を生きる困難さである。ボーイの返答には、このような事情が如実に表れていた。

(社会学者)

# 失業を恐れて保守的に

コラム……………

## うちなあ見聞録

221



打越 正行

### 革命のない大富豪

大富豪というトランプゲームがある。建設現場の昼休みや、週末の打ち上げなどで、仲間と盛り上がる定番のゲームだ。大富豪はゲームごとのあがる順番で順位が決まる。最下位の者は、次のゲームを始める前に勝者に有利なカードを渡し、その代わりに

不要なカードを受け取る。強い者はより強くなり、弱い者はより弱くなるルールが、このゲームの醍醐味のひとつである。

しかし格差が広がるだけでは盛り上がり欠けるので、このゲームには革命というルールもある。特定のカードがそろえば、カードの強弱がすべて反転するルールが革命だ。それによって格差はひっくり返る。

調査でお世話になっている沖縄のヤンキー、建設業の若者たちが楽しむ大富豪には、革命のルールが設定されないことが多かった。彼らは大富豪に革命があることを知って

いるが「つまらない」と言い、革命のない大富豪を楽しんでいた。特に参加者数の多い時は交換するカードを二枚に増やし、革命なしルールが盛り上がるのだという。自身の能力と運だけで格差をのし上がる。そしていったんトップをとれば、その後は弱い者からとり続けることは正当化される。格差を固定化し拡大させる仕組みはそのゲームの参加者によって認められていた。

こじつけかもしれないが、このローカルルールは沖縄の建設業の現実と大きく重なって見える。「いろいろ言われてもよ、稼いだもん勝ちだばーよ。(社長は)相当儲けて

るはずよ」とある従業員は語る。建設業の従業員が社長に待遇に関して異議申立てを行うことはほとんどない。むしろ、後輩たちを引き連れて利益をあげる社長の姿には尊敬のまなざしさえあり、そのような地位に立つことをみんなひそかに狙っている。

本土の大手ゼネコンの下請けを担う沖縄の建設業は、不安定であることが常態化してきた。よつてたとえ社長となつても倒産して地元から逃亡したり、破産して給与未払いとなる建設会社が少なくない。そのため、長く存続して継続的に給与を支払う会社が従業員からは高く評価されていた。このことを軽く考えてはならない。

このように失業と隣り合わせの世界を生きる従業員に革命は遠い出来事だった。失業

という今の生活の形を失う恐怖を感じる人たちにとって、そのような生活を支える仕組みそのものをひっくり返したり、批判的に問い改善することとは求められていない。

現存する仕組みが格差を拡大させる不公平なものであつても、失業する恐怖にある人びとがその仕組みやそれによつてまわっている生活やその仕組みを守ろうとするのは当然の帰結である。

失業の恐れを感じながら生きる彼らは不公平な現実を劇的に変えることより、その現実を守るうとする。革命のない大富豪から、彼らが保守的に生きるわけがみえてくる。

沖縄社会を確かに支える建設業に従事する人びとの生活を守り、その生き方を尊重した施策が求められる。

(社会学者)



# 外部化した沖縄建設業

コラム

## うちなあ見聞録

224

沖縄の「戦後」を生き抜いた人たちが、現在の沖縄の建設業を支えている。そこには年金をもらえないため、60代後半になっても働き続ける男性がいる。前借りを繰り返しながらその日暮らしの生活を続けてきた彼が、老後の生活のために年金を納める余裕



打越正行

### 学校を去る若者

はなかった。

ある従業員は仕事に後遺症の残るほどのけがをした。だが、彼は安全帯を使ってい

なかつたため半額程度しか補償金を受け取れなかつたとい

う。多くの資材を速く運ぶこ

とが求められる建設現場で、

煩わしい安全帯を使って作業

する者はほとんどいない。

この他にも、定期健康診断

を受けないため、生活習慣病

の発見が遅れ、40代にして亡

くなった方もいる。仕事を休

むとその日の給料は支給され

ないばかりか、それ以上の出

費がかかる健康診断に行くこ

とはない。年金や労災、健康

診断などの制度は、沖縄の建

設業を生きる人ひとには、今

までもそして今でも存在しな

いに等しい。

現在、20代、30代の若者は、

このような上の世代の現実を

みて自身の生活、人生を組み

立てる。その人生設計のひと

つとして、彼らは学校を自ら

去る。彼らの学歴は、ほとん

どが「中卒」だ。中卒といっ

ても中学卒業直後に働き始め

る事例が多くを占める。彼ら

は、中学に行かずに地元の先

輩の働く建設現場で手伝いと

して作業経験を積む。

彼らを排他的に追い払う学

校や、強引に建設現場に連れ

出す先輩たちの存在も無視で

きない。しかし彼らが学校を

去るのは、彼らが周囲のモデ

ルや見通せる範囲で将来のこ

とを考えたうえでなされる彼

らの選択でもあった。

このことを理解するために

外せない統計データがある。

2013年の総生産の産業別

割合によると、第二次産業の

割合は沖縄が14・1%（うち

製造業5・3%）、全国平均

が26・1%（うち製造業21%）

である。大ざっぱにみれば、

肉体労働が主な就職先である

沖縄のヤンキーの若者たちが

稼げる仕事は全国平均の半分

しか沖縄にはない。そしてそ

の数値が半分になっているの

は製造業が抜け落ちているた

めである。

実は、学校と製造業は相性

がいい。ともに規律訓練型の

施設であり、それぞれ評価基

準やマニュアルに沿った段階

的な仕組みである。他方で建

設業の作業の多くはマニュアル

ルではなく、先輩ごとに異な

る作業手順に先輩たちが合わ

せる形で習得される。このよ

うに沖縄の建設業で生き抜く

ために、学校は実質的に役に

立たない。ゆえに、彼らは早

々に学校を見切り、地元の方

々々との上下関係に行きつ

くのは必然的である。

このように沖縄の建設業に

生きる者たちは、長い間にわ

たり年金や労災などの社会制

度や学校などに頼ることなく

自ら生活をつくり、人生を切

り開かざるをえなかつた。こ

の点で本土の肉体労働者が生

きる世界の「外部」に彼らは

生きてきた。日本社会の高度

経済成長は、外部にある沖縄

の建設労働者から取奪し、依

存する形で可能となった歴史

であることを忘れてはならな

い。

（社会学者）

# 言語が社会生活を制約

コラム……………

## うちなあ見聞録

228



打越正行

ヤンキーうちなあぐち

沖縄のヤンキーの若者たちが日常的に話している、ヤンキーうちなあぐちとでもいべき言語がある。それは、状況や関係性に依拠してつくられている生きた言語である。ゆえにその言語の境界は地域や世代によってある程度区分されたうえで、職業や階層によ

って拡大縮小している。

建設作業員の太一たちと繁華街に飲みに行った際、かつて暴力トラブルを起こしていた太一らはほとんどの店に入店を断られた。知り合いの店でさえそのような対応をされた彼はそのことを振り返って憤慨した。

「わったー、しつちよーのみーで安くで入れるよ(と思つたら)。でーじうしえーてる、C(繁華街名)よ、C、わーが来たら、おー、(キャッチたちが)変な顔するよ。(俺のことを)しかんでるよ。はっ、わーが来てるばー、じらー。やんど。うかさいはずよ、しなされるどー」

太一らは家庭では父親や母親が不在がちで祖母や祖父と

うちなあぐちの環境で育った。また、建設現場では一回り上の世代の先輩たちの指示はうちなあぐちで出された。そのような過酷な環境を経験する過程で、彼らはうちなあぐちを身に付けた。

また、ある状況や関係性において適切な言葉を用いることは、地元を根を張って生きてきた証となった。地元の社会関係をともに地元で働く限り、その言語を身に付けることは理にかなっている。このように自身の地位や経験、そして連帯感を誇示するために、彼らはうちなあぐち

をくずして用いた。他方で彼らは先輩と話す時はいわゆる普通の日本語を話した。彼らの多くは異なる2つの言語を使い分けていた。

沖縄のヤンキーの若者の多くは、地元のつながりをもとに地元で働く。それは相互扶助のつながりというより、抜けたくても抜けることの難しい過酷なものである。そのようにながりが形成された主要因は、製造業が抜け落ちている産業構造にあることは本コラムで述べてきた。それに加えて彼らが用いる言語によっても、彼らは地元つながりから抜け出せなくなっていた。

た業種である。マニュアルによる体系的な評価システムが製造業には欠かせない。そして建設業は関係性や状況に制約を受ける断片的で指示語の多い言語を運用する能力が求められた。それらの言語に優劣はなく、どれも洗練されたものである。しかし、建設業に就くヤンキーの若者たちの言語は地元の関係性、仕事でのみ通用するものである。彼らが製造業やサービスマンに転職することが難しいのは、言語による影響も見逃せない。

彼らが職業選択や社会生活の制約を受けるのは、言語能力を欠いているためではなく、特定の言語を習得することと不利益を被る社会構造によるためである。問われているのは、社会の側である。

(社会学者)

# 景気関係なき雇用重要

コラム……………

## うちなあ見聞録

建設業は製造業と比較して、不景気に弱い業種である。

「受注生産方式」の建設業は、公共事業や大手民間業者からの発注が止まったら、仕事は止まる。なかでも中小零細の建設会社が多くを占める沖繩の建設業は、いままで不景気になるたびに倒産を繰り返さ



打越 正行

### 新型コロナと建設業

232

ざるをえなかった。

現在、新型コロナウイルスが猛威を振るっている。経済が止まり不景気になれば、再び建設業は大打撃を受ける。実際、4月末から仕事が途切れ、収入を断られた従業員も多い。以下では、過去の不景気の事例を振り返り、それに基ついた方策を示す。

県建設業協会会長だった国場幸太郎氏は、1975年の海洋博について以下のように述べている。

「海洋博は沖繩経済においては集中豪雨のようなもので、いくらもストックされなればかりか、大きな被害を残した。沖繩経済の危機は海洋

博後にやつてくるといわれてきたが、甚だ残念ながらそのような事態が現実となつてあらわれ、建設業界では倒産が続出して苦しい立場にある。

海洋博では、県内業者は県産資材を優先するということがあつたが、それができなかった。沖繩が生きのびるには、沖繩で発注するすべての公共工事に県内を優先する以外にない」（沖繩県建設業協会40年史）

国場氏は、海洋博後の経済の落ち込みによって、県内建設業が大きな被害を受けたと憤る。彼は沖繩の建設業をより安定した業界とするために受注を受けるだけではなく、

発注側にまわる県内完全受注を訴えた。これは富を奪い返すだけでなく、富を分配する主導権を渡さないことを訴える主張であつた。

また、国場氏は海洋博後の陳情で公共事業の増加だけでなく、公共事業を途切れさせないこと、そして平準化した受注を要請している。彼にとつて沖繩の建設業は利権団体、支持基盤であるだけではない。そこに末端で働く人びとの生活が確かに見えている。そしてそれらの人びとの生活を守るといふ強い意志をその要請からは読み取れる。

2010年代に入つて、那覇やその周辺地域を中心に建設業は好景気であつた。一部の従業員は、地元建設会社から、より給料のいい会社に移つたり、会社を通さず知り

合いで仕事をまわしたりするようなことも生じた。しかし、不景気になると工事も減り、参入してきた内地の会社も撤退する。そして多くの建設作業員は再び失業する。不景気のたびに生じる沖繩の建設作業員による失業の経験は、内地の建設業や沖繩の安定層には生じえないことである。

彼らの雇用と生活を守るには、景気に直接左右されないような雇用形態が重要である。そのために、まずは基幹産業である建設業を、国場氏の指摘するように県内完全受注とし受注量の安定を図ることである。それに加えて、公共事業の建設作業員を公務員とすることである。過去の歴史やそこを生きる人々との実態に基ついた方策が早急に求められる。（社会学者）

# 生活を守るといふ闘い

コラム……………

## うちなあ見聞録

236

私は沖縄の暴走族やヤンキーの若者への社会調査を10年以上続けてきた。彼らが生きている人間関係や就労環境は過酷なものだった。

なぜ建設業を辞めないのか。なぜこの厳しい先輩たちとの関係を絶たないのか。なぜ地元を出ないのか。私は分



打越 正行

分断を超えて

からなかったもので、彼らに直接聞いた。彼らは「知らんよ」と答えた。これは、文字通り分からないという意味でもなく、また答えていないことを意味する無回答でもない。分かってないのは、私の方なのだということは分かった。10年以上調査を続けた。そして少しずつみえたり分かったりしたことの一部を本コラムでは書いてきた。

沖縄のヤンキーの若者は地元人間関係をもとに生活の形をつくり、懸命に働いていた。彼らの多くは、建設業、風俗業、そして違法就労に就いた。どの仕事でもトップをとらないと、地元で一生こき使

われる仕組みになっていた。特に建設業は、不景気のたびに倒産、失業を経験させられてきた。彼らの中には上下関係が定着し、後輩への暴力も常態化した。多くの後輩を引き連れることが地元で生き抜く資源となり、地位の獲得につながった。「那覇は怖い」といった空間感覚や、彼ら独自のヤンキー「うちなあ」は、人の移動を固定化させ、職業選択や社会生活を制約した。

他方で、そのような社会関係、身の処し方、感覚や言語は、彼らが過酷な現実を生き抜くために自らつくりあげたものでもあった。地元の建設会社は、さまざまな事情を抱える地元の後輩を従業員として囲い込んだ。会社に雇われることで、彼らはやっと生活の形にたどりつけた。それは公的扶助に守られていない彼らにとつて、二度と手放したくないものであり、それを守ることが至上命題であった。そのようなことは、現在だけでなく「復帰」以降から続いてきた。先輩たちの生きざまをみて育った若者たちは、学校を早々に見切り、身ひとつで生きることを若いうちから選び取ってきた。彼らには製造業やホワイトカラー職におけるステップアップ可能な就労環境は整備されておらず、不景気になると真っ先に仕事と生活の形を失うことになった。彼らの仕事や生活は、何の保障もない不安定なものであり、それを強いられてき

(社会学者)